

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	周 躍
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) Structures and Meanings of Adjectives in Chaucer's <i>Troilus and Criseyde</i>			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		准教授	大野 英志
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		教授	今林 修
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		教授	吉中 孝志
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		教授	大地 真介
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		岡山理科大学・教授	地村 彰之
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>1 4世紀英国詩人ジェフリー・チョーサーの代表作『トロイルスとクリセイデ』の主要登場人物の解釈は、物語の展開を背景に多く論じられてきたが、人物を修飾する形容詞の観点からのものは数少なく断片的である。本論文は形容詞の現れる構造および当時の意味という観点から、詩人が人物をどのように描こうとしていたのかを詳細に考察している。</p> <p>本論文の構成は、序章と5章からなる本論、そして結論からなる。</p> <p>序論は、チョーサー作品および本作品の語彙に関する先行研究を挙げ、特に後者は網羅的でなく議論が十分ではないことを指摘する。そして、本論文の方針として、チョーサーの全作品や同時代の詩人の作品を調査し、また本作品の原典との比較も行い、チョーサーの独自性および登場人物の新しい解釈を明らかにすると述べる。</p> <p>第1章は、登場人物を修飾する形容詞の現れる構造の中で顕著な「並列された形容詞」を中心に考察を行う。この構造を発話者、修飾対象、形容詞間の位置関係や意味関係、原典という視点から考察し、その構造が語意の明確化や韻律上の要請ではなく、頭韻や類義語の使用により特に主人公の感情等を強調するために用いられること、翻案の際にこの構造を加筆していること等を明らかにする。</p> <p>第2章は、主人公トロイルスを修飾する形容詞を、チョーサーの他作品における騎士を修飾するものと比較しながら分析する。トロイルスを修飾する特徴的な <i>wise, worthy, wo-bygon</i> が表す彼の意図や感情、先行研究に言及されていないニュアンス等を考察し、彼には恋のもたらす楽しさより悲しみが目立ち、また彼は無為な性格であることを主張する。</p> <p>第3章は、ヒロインのクリセイデを修飾する形容詞をその発話者ごとに分類し、彼女の繊細な感情、そして彼女に対する彼女自身や他の登場人物やナレーターの評価を、特徴的な形容詞 <i>fresh, gay, lufsom</i> 等の詳しい分析により考察する。結果として、形容詞から見た彼女は原典のヒロインより身分が高く、彼女の自信と自負は叔父パンドルスの脅迫とも言える説得の前では恐怖心の元となり、また運命に翻弄された彼女の心は悲しみと利己へと変化したと結論づける。</p> <p>第4章は、他の主要人物であるパンドルスとディオメーデを扱う。まず、パンドルスを修飾する形容詞を第3章と同様に、発話者と相手を基準に分析する。特に <i>wylde, mad, confus, skilful, resonable</i> の考察から、話術は得意だが言葉と行動が伴わないということが彼の本質的な性格であると主張する。次に、ディオメーデの考察を行い、彼を修飾する形容詞には肯定的と同時に否定的な解釈も可能であるものが多く、“conscious ambiguation” (Kennedy 2001) が窺えることを指摘し、さらには原典との比較から詩人のディオメーデに対する態度を読み取り、これらの形容詞を否定的に解釈するの</p>			

が合理的であると結論づける。

第5章は、神や自然に関係する事物を扱う。形容詞を修飾対象別に考察し、チャーサーが例えば *laurer-crowned* や *(floures) blew* に古の作品などへの暗示を込めたと主張する。また、自然物の描写から見える登場人物の性格を指摘し、人物像のより多様な解釈の可能性を主張する。

結論では、本論の議論をまとめ、詩人はこの作品を書くに際し、原典に縛られず、新しい形容詞を作ったり、既存のものを新しい意味で用いたりすることにより、独創的な “conscious ambiguation” や “ironic tone” を作り出したと結論づける。

本論文は、論の詰めが若干甘い箇所があるものの、形容詞の構造と意味について原典ならびに共時的な資料を網羅的に精査し、作品への新しい解釈を提示するという挑戦的な秀作で、評価に値する。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)